

# 国語科分科会報告

## 説明的文章を正しく読み取らせる 指導法はどうしたらよいか

### 継続研究4年次の報告

#### 1 はじめに 一経過にふれて一

私たちは、共同研究の初年度（昭和44年度）において、「説明的文章を正確に読みとらせる指導過程はどうしたらよいか」をテーマに選び研究を進めた。つづいて、2年度（昭和45年度）においては、「文学的文章を正確に読みとらせる指導過程はどうしたらよいか」について研究した。これらのテーマはいずれも、文章を正確に読みとらせることと、その指導過程を問題にしてきた。そして、その成果は、本教育研究所紀要Ⅱ2～Ⅱ3に既に発表したところである。

また、第3年度（昭和46年度）は、「説明的文章を正確に読みとらせる指導はどうしたらよいか」のテーマに再び取組み、第1年度と第2年度において提示した「指導過程」にさらに「指導形態」「学習評価」の二つを加え、この三つの学習方法を問題にしなごら「ひとりひとりに確かな読みの力をつける指導はどうしたらよいか」について、主として中学校の場合について追求した。そしてこれらは、本教育研究所紀要Ⅱ4に既に発表した。

そこでは

1. ひとりひとりを見つめるということはどういうことか。
2. 国語科の学力とは何か。
3. 「確かな読み」とはどういうことか。
4. ひとりひとりを生かす学習形態はどうあるべきか
5. 構造的な理解を深める学習過程はどうあるべきか
6. 自己評価をとり入れた授業のあり方はどうしたらよいか
7. 3側面を統合調和させた—説明的文章をより確かに読み取らせる授業のあり方はどうしたらよいか

などについて、加藤・寺門・長須の3教官がそれぞれ実践をとうして追求してみたわけである。さて、今回は、この第3年度の研究をそのままうけて、三側面を調和統合させた授業のあり方について、一つの結論を提示することにした。それが、「課題場面の構成と展開を中心にした説明的文章の正確な読解」ということである。（今回は紙面の都合により基本的な考え方のみを述べ、実践例を省略した。

#### 2 説明的文章の要点を正確につかみ、文章の筋道や構成を正しく読み取らせるため

に、課題場面の構成と展開はどうしたらよいか 一中学1年 光村図書 単元三  
文章の筋道(二)「フシダカバチの秘密」を素材にして一

(1) 1年生のねらいをどこにおくか

説明的文章の読解指導のねらいは、3年間の系統の上から次の4点にしぼっておくことにした。

- ア 要旨 ー 表現に即して要旨を正しくとらえること。
- イ 内容 ー 要点と事がらを明確に押えて内容を正しく読みとること。
- ウ 構成 ー 文章の組み立てと筋道が読みとれること。
- エ 見方・考え方ー文章に書かれている筆者のものの見方や考え方をとらえること。

(2) よりすぐれた課題意識をもたせることで押えていること

ア よりすぐれた課題意識の条件

私達は説明的文章をより正しく読ませる指導の視点を、指導形態、指導過程、自己評価の三側面の調和、統合する授業の構造として「課題場面の構成と展開」におくことにしたのであるが、これを国語科においては、次のようないくつかの条件を備えたものと考えた。

- ・意図・要旨により正しく接近しようとする構え、意欲を明確にもつこと。
- ・読み手に読みの方向づけを与え、読みの手順を明確に示唆すること。
- ・初発の課題意識より発展して、読みの深まりとともにさらにいっそう豊かに確かに次の段階へと展開し、目標に迫る求心的、構造的な順序と過程をとまらぬ読みであること。
- ・主体的、意欲的に課題解決な取組みその結果の正、不正が自からわかり、わかったこと、わからないことの区別の上に立って、成功感、満足感、探究心をもって学習に取り組むかまえてあること。

イ よりすぐれた課題意識をもたせる読み方指導の条件

よりすぐれた課題意識をもたせる条件を上記アのように押えた場合、説明的文章の課題意識を持たせるための読み方指導の条件はどうであつたらよいかを次のように考えてみた。

- ・生徒主体の読みであること。
- ・意欲的、積極的であること。
- ・文章内容、価値内容から技能が引きだされ、触発されるものであること。
- ・個別、集団、グループの学習形態が即生徒、即教材、即目標によって移動すること。
- ・先行経験に裏づけられ、文章と読み手の接点が密着・密接の状態にあること。
- ・個性を生かしたものであること。
- ・新しい発見の喜びがあるようにさせること。ー 既知、未知、反対、疑問などが素直にはつきり言える ー
- ・初読(第一次の読み)の手続きや感想をたいせつにし、そこから問題が発見されること。
- ・精選され、構造化された読みであること。